

新島基金による新島講座について

同志社創立百周年記念事業の一環として同記念事業寄付金の一部をもって新島基金が設立されました。

○新島基金の目的

新島基金は、同志社立学の精神にもとづき、人間教育を強化し、教育内容の高度化を図り、教育、研究の国際交流を推進し、もって一国の良心たよりうる人材の育成に資することを目的とし、

基金の果実をもって (1)新島講座の開設 (2)新たな奨学制度の開設 (3)教育・研究の国際交流の推進などを行うことになっております。

○新島講座

新島講座は、つねに時代を先導する同志社の教育と研究が、更に一層充実、発展し、またその成果が社会の進展に寄与するようにと願って新島基金の目的事業の一つとして設立されたものであり、内外の碩学を招聘し講演会などを開催する講座と、本学園教職員がその研究成果を発表する東京講座の二種類を毎年開催することになっています。

第六回新島講座東京公開講演会

昨年十月十九日(土) 東京・有楽町朝日スクエア(有楽町マリオン十一階)にて、新島講座第六回東京公開講演会が開催されました。

十三時三十分から始まった講演会は、松山総長のあいさつ、園部庶務部長の司会で坂本武人同志社女子大学教授、末光力作同志社大学工学部教授の順で行われました。

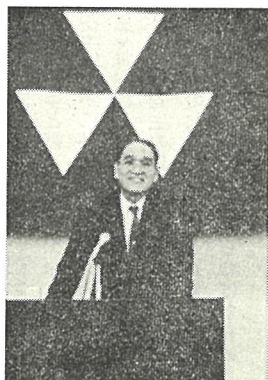
演題ならびに講師

○高齢化社会における生活構造と生活問題

同志社女子大学教授 坂本 武人

○新島裏と科学教育

同志社大学工学部教授 末光 力作



坂本武人教授

坂本武人教授講演要旨

「新島先生の教えの日常生活化」を目指して生活問題の研究に携わる者として、高齢化社会といわれる現在生活の仕組みを分析し、そこにおいて生起する諸問題についての考察をめぐらせてみたいという前置きのもとに始められた。

そして、まず、「高齢化社会」といわれる現状を厚生省の人口統計をもとに報告され、一九七〇年、65歳以上人口が総人口の7%を越え、「高齢化社会」の仲間入りをしたわが国が、その後も急速に高齢者人口比率を高め、一九八五年現在10%を突破

し、35年先の二〇二〇年には21・8%と実に人口の5人に1人は高齢者という超高齢化社会が実現すると推計されていることを述べ、それが、平均寿命の大幅伸長と急激な出生率の低下にもつくものであり、高齢者の生活を支える私的、あるいは公的基盤の欠如という重大な問題を内包していることを明らかにされた。

ひるがえって、高齢化社会を迎えるに至る戦後40年間の生活構造の変化について触れ、それが10年毎に変化する形態を有するものであると共に30年をタームとする一大変化のあることを指摘された。すなわち、あの無謀な戦争によってひき起された「どん底」の生活から脱却を図る昭和二十年代は生理的欲求充足の10年間であり、三十年代は、物質主義的生活観の囚となり、「冷凍庫を買うか、子供を産むか」といった全く比較しえない事柄の比較をあえて行なわせる物的欲求充足の10年であり、そして、四十年代は「生きがい」「物ばなれ」意識の高まりの中で自己実現欲求の充足を

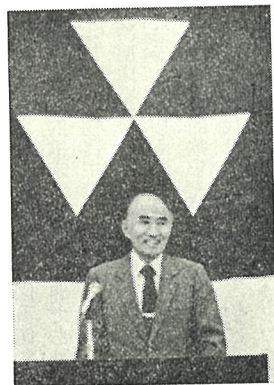
図る10年間であったと指摘され、結局、この30年間は、生活上の不足を補なう「量的拡大」の30年と規定することのできると要約された。そして、昭和50年代に入ると一方では資源問題についての不安を強く意識しながらも、無限に高まる生活財について「質的向上」意識にさいなまれた10年であり、それに続く六十年代は、この不安に加えて、先き行きのこと、すなわち、個人的には老後生活、社会的には人口の高齢化に対処する確な手段を持ちえない不安の積み重なる10年であり、さらに二十一世紀を迎える昭和七十年代は、目の前に展開されるであろうスタンウォーズ（核戦争）の危機に対する不安が現実のものとなる10年と推論され、この30年を不安の時代と規定された。

このような不安の時代に対処する生活の最重点課題とする生活構造のもとにあって重要なことはいまだ一度新島先生の立学の精神に立ちかえり、素晴らしい可能性を有しているが相対的な存在にすぎない人間の知

恵と力に頼るだけではなく、人間を超えた存在としての神の豊かな愛に導びかれ、その愛を実感する生き方を体得するより高い次元の生活の実現を図ることであり、そのための学問、研究にたずさわる人の育成が必要と述べられ、これが新島先生の意志をうけつぐ研究、教育機関に求められている最重要課題であると結ばれた。

末光力作教授講演要旨

今年（一九八五）は創設百年（白寿）を記念する催しが色々行われている。日本のメートル条約加入、世界標準時採用、あるいは京都疏水運河起工などである。つまり今年は日本の近代化百年を記念するのにふさわしい年と言うことが出来よう。新島襄先生は確かに日本の近代化に大きな貢献をしておられる。先生を祭り上げて偶像化することは先生の最も嫌われるところであるが、先生のなされた功績を正確に知ることが同志社人として当然やらねばならぬことである。



末光力作教授

明治八年十一月二十九日、同志社英学校が開校したとき、開講科目の約半数は自然科学に関するものであった。この点、同志社は法律学校として出発した他の多くの私学とは根本的に違っている。同志社は困難な経済状態の中で明治十九年には同志社病院、京都看護婦学校、さらに明治二十三年には同志社ハリス理化学学校を開校して、黎明期の日本の科学に大きな貢献をしている。明治二十一年十月五日、疏水工事中におきた落磐事故の際、同志社病院院長ベリーの率いる救助長が見事、六十五人の生命を助けたのである。

新島先生は十三歳で蘭学に志し、十八歳で幕府の軍艦教授所に入所し、当時としては最高の科学教育を受けた。函館への航海の模様、函館での生活が、「函館紀行」として残っているが、その観察の鋭さ、強い批判精神が随所に見られ誠に興味深い。

新島先生がアーマスト大学で受けた教育は所謂リベラルアートの教育で、此処で先生は自然科学に興味を持つようになった。同じくアーマスト大学の卒業生である内村鑑三はアーマストの教育は「学生に知識をつめ込むのが目的ではなく、如何にして学問に興味を起こさせるかが教育の目的であった。」と述べている。この様な秀れた自由教育を受けた先生は生涯を通じて地質鉱物学に強い関心を払ったのである。先生の残した漢詩「石炭之贊」を読むと鉱物学者新島の面目躍如たるものを感じる。明治十四年二月には先生は京都四条の劇場で「隠君子の出現」と題して一般市民向けの講演を行っている。隠君子とは地下に隠された君子、つまり石炭のことだエネルギーとし

ての石炭の重要性を説き、人々に強い感動を与えたという。

新島先生は植物学、農学にも強い関心を払った。この領域で先生に大きな影響を与えたのは札幌農学校創設期に副学長として貢献し有名なボーイズ・ビ・アンビシャスの言葉を残していったW・S・クラークである。クラークと先生との交わりは先生のアーマスト時代からクラークが死ぬ一八八六年まで続くが、その間二人は太平洋を挟んでさかんに植物種子の交換を行っていた。

同志社大学設立の旨意の中に「一年の謀ごととは穀を植ゆるに在り、十年の謀ごととは木を植ゆるに在り、百年の謀ごととは人を植ゆるに在り。」と述べられている。この言葉は植物学に強い興味を示した新島先生の言葉として味わいたいと考える。

第九回新島講座

昨年十月二十一日（月）、十月二十三日（水）の二日にわたり、中国の科学院自然科学史研究所（北京）教授潘吉星先生を迎えて公開講演会が開催されました。

○テーマ「イケットの起源について」

十月二十二日午後一時

於 同志社大学神学館チャペル

○テーマ「ダーウィンと中国」

十月二十三日午後一時

於 同志社大学神学館チャペル

潘吉星先生は、『中国造纸技術史稿』一九七九（邦訳、『中国製紙技術史』、平凡社、



潘吉星教授

一九八二）によって国際的に高く評価されている方であり、一九八三年に紙の研究者に招かれて来日されたことがあり、その他アメリカのペンシルヴァニア大学客員教授、英国ケンブリッジ大学のフェローをされたこともある。日本でも中国科学技術史研究者、中国学者、紙の研究者の間に知己が多く、今回も何人かの方々がわざわざ東京から会いにこられた。今回の新島講座の二回の講演はいずれも超満員で、立って最後まで聴いて下さった方も多く、東京や名古屋からの来会者もあった。毎回、講演の後、有終館の会議室で、とくに有志のために質疑応答の懇談会をおこなったが、いずれも熱心な討論がなされた。

第一回の講演テーマである「ロケットの起源」については、すでに数十年前から各国の学者による研究があり、火薬が発明された中国において、火薬を推進力としたロケットの祖型と、花火が中国で作られたことには各国の学者の見解は一致しているが、その正確な起原については意見は大き

く分かれている。紙の研究で世界的名声を確立した潘吉星先生は、現在、このロケットの起原についての最新の研究を脱稿し、目下、北京で印刷中である。したがって今回のロケットの起原についての通俗講演ではなく、先生の最新の研究成果をきかせていただき、聴衆に深い感銘を与えた。

「チャールズ・ダーウィンと中国」という演題からは、普通、思想としてのダーウィニズムが中国にいかに関与を与えたかという社会ダーウィニズムをただちに連想するが、実はさにあらず、ダーウィンが自然選択の進化論の諸著作を書いたとき、深く中国や日本の古文獻、李時珍の『本草綱目』や貝原益軒の『大和本草』などの知識まで吸収していたことを考証した研究であり、『本草綱目』に精通していると同時に、ダーウィンの諸著作を多年熟読してきた潘吉星先生にして始めて可能な研究であり、昨年アメリカの科学史雑誌に発表されたばかりのものであった。ヨーロッパでは十八世紀になって始めて知られた金魚を、中国では

十一世紀、宋代の杭州ではどの家でも愛玩し、ダーウィンによって明らかにされる進化の法則をすでに実践していた話など興味深いものがあつた。また中国のソーシャル・ダーウィニズムにも言及され、嚴復、梁啓超、魯迅など中国近代の思想家や作家に、ダーウィンがいかに大きなインパクトを与えたかの話も、主題ではないまでも、きわめて興味ある話題であつた。総長はじめ同志社本部の方々の並々ならぬ御努力の結果、この新島講座が成功裡に終了したことを心から喜ぶたい。なお講演は英文で同志社から出版される予定である。

新島講座・講演内容公刊について

○第一回講座

「THE LIBERAL ARTS TODAY」

アーモスト大学副学長

プロクター・ギフォード博士

頒価七〇〇円

○第二回講座

「STREAMS OF GRACE」

— studies of jonah an edwards, samuel taylor coier coleridge and william james —
ハーバード大学教授
リチャード・ラインホルド・ニール博士

頒価一、三〇〇円

○第三回講座

「THE PROFESSIONALIZATION OF SCIENCE」

— france 1770—1830 compared to the united states 1910—1970 —

プリンストン大学教授

チャールズ・クールストン・ギリスピー博士

頒価七〇〇円

○第四回講座

「CHANGING BRITISH VIEWS OF JAPAN SINCE THE 19TH CENTURY」

ロンドン大学 (SOAS) 教授・日本研究所所長

ウィリアム・シュラルド・ビーズリー博士

頒価一、〇〇〇円

○第五回講座

「LIBERALISM, CONSERVATISM, AND AMERICAN POLITICS」

コーネル大学教授

セオドア・J・ロウイ博士

頒価五〇〇円

○第六回講座

「CHRISTIAN WITNESS IN CHINA TODAY」

南京大学副学長・南京協和神学院院長

中国基督教三自愛国運動委員会主席

丁光訓先生

近日公刊 頒価未定

○第七回講座

「THEORETICAL AND APPLIED LINGUISTICS, PAST, PRESENT, AND FUTURE」

ロンドン大学(SOAS)教授言語学部長

ロバート・ヘンリー・ロウビンズ博士

近日公刊 頒価未定

近日公刊 頒価未定

○「環境と法律」

ハーヴァード・ロー・スクールで教えて

元同志社大学法学部教授・現東京大学

法学部教授 藤倉皓一郎

○(第一回東京講座)

「時間と人間の経済活動」

同志社大学経済学部教授 榎原胖夫

○(第一回東京講座)

「白砂を訪ねて」

一鳴き砂の秘密

同志社大学工学部教授 三輪茂雄

○(第二回東京講座)

「縁起絵巻の世界」

一日本人の信仰に関連して

同志社大学文学部教授 笠井昌昭

○(第三回東京講座)

「財閥の家憲と華族の家憲」

一とくに財産管理について

同志社大学商学部教授 安岡重明

○(第三回東京講座)

「新島襄全集をめぐって」

一新島襄と仏教徒たち

学校法人同志社社史資料室室長

河野仁昭

○(第四回東京講座)

「同志社ラクビーとともに」

同志社大学文学部教授 岡仁詩

(第四回東京講座)

○「新島襄と科学」

同志社大学工学部教授 島尾永康

○(第五回東京講座)

「最近の医療問題」

同志社大学法学部教授 大谷 實

○(第五回東京講座)

各冊子とも頒価五〇〇円

発行者・学校法人同志社

取扱い・同志社収益事業課

(電話〇七五―二五一―三〇三七〇)